天使突抜おぼえ帖　目次

序
うちの洗濯カゴ……6
第一部　天使突抜の人々　11
照子さんの塩昆布……12
花売りのおばさん……38
奥方のレッスン……50
角打ちとヴェルディ……66
還暦越えの生徒さん達……75
満永小百合さんのこと……102
第二部　記憶を紡ぐ　155
三つ子の魂、できあがる……156
お前、通崎と結婚せい……175

マリンバ手習い、お寺から……187
ベートーヴェン『交響曲第七番』……200
アンティーク着物に魅せられて……227
私の文章ことはじめ……235

第三部　通崎家の京都百年　265

富山から京都へ……266
乾柿と銀杏……288
満洲帰りの少女……308
どちらでも……325
三度の救急車……344
おわりに……374

序　うちの洗濯カゴ

うちは、ものを長く使う家だ。

例えば、洗濯物を干す時に使っている、アルミ製のカゴ。

これは、私が子どもの頃からずっと同じ物を使い続けている。

ある日、そのカゴは、昭和三十年前後に発売された洗濯機の付属品であることがわかった。当時は、洗濯機上部に手回し式絞り機が付いていて、そこに洗濯物を挟んで水気を切るスタイルだった。洗濯機の側面には、その洗濯物を受け止めるためのアルミ製のカゴが、取り付けられるようになっている。

それが、現在のうちの「洗濯カゴ」というわけだ。

母に、「これ、いつから使ってんの?」と尋ねてみたところ、「私がここにお嫁にくる前から」とのこと。洗濯機はさすがに何度か買い換えているが、このカゴは、七十年近く経った今もなお「洗濯カゴ」として現役でいる。

京都といえば、逸品を手に入れて代々受け継ぐ、というイメージがあるかもしれない。しかし、我が家の場合、そういうことでもない。ちょっと、ずぼらなところがあるのだろう。

積極的に捨てる理由が見当たらないものは、捨てない。

私が嫁(とつ)がず実家にいるため、図らずもそのようなものを「受け継ぐ」ことになる。

結果、手狭な長屋にもかかわらず、いろんなものが溜まっていく。

コンサートを聴きにきてくださった編集者・佐藤さんに「是非、天使突抜のことを書いてください」と言われた。天使突抜とは、私が生まれ育ち、今も暮らす京都市下京区に実在する町名である。随分斬新な名前だが、実際のところは庶民が住む、いわゆる京都の下町だ。

その気になってゴソゴソと探してみれば、我が家では、大正時代に購入した仏壇の製作「請合(うけあい)書(しょ)」までがとってある。父からは、「通崎家は、富山から京都に出てきて、最初に墓と仏壇を買ったそうだ」と聞いていた。領収書の日付からすると、通崎家の京都暮らしもようやく百年が経ったことになる。

また、戦時中、南京(ナンキン)陸軍病院で病死した叔父の「遺留品袋」から見つけた手紙など、私にこうして見つけられることを待っていたのではないかとさえ思わされた。

古い物に限らず、私や三つ年上の姉が幼稚園の頃に書いたお絵かきや日記帳などのたぐいも、残してある。

私は、一九六七（昭和四十二）年生まれ、今年五十五歳。
一九六四年の東京オリンピックは知らない。
一九七〇年の大阪万博は記憶にないが、黄色い万博の帽子をかぶった写真が残る。
そんな世代だ。

近くのお寺、上徳寺の一室で開かれていた教室でマリンバのお稽古を始めたのは五歳の時のこと。だからマリンバを弾き始めて五十年になる。
プロの演奏家を名乗るようになって三十年、京都とアンティーク着物のことを書いた初めてのエッセイ『天使突抜一丁目――着物と自転車と』（淡交社、二〇〇二年）を上梓してからは、二十年が経つ。
時の流れは早い。自分でも驚くばかりだ。

当初、「天使突抜のこと」、すなわち京都の下町の日常を綴ると言われてもピンとこなかった。
しかし、「むっちゃん」と呼んでかわいがってくださった、近所のおっちゃんやおばちゃん達が次々と鬼籍に入られていく。そして、古くからあった家が解体されマンションが建ち並ぶ。
つい最近まで、お仏壇に供える御仏花はうちに回ってきてくださる「白川女」のおばさんから買っていた。しかし、そんな京都の風物も、この十年、二十年で、見られなくなるものがどんど

ん増えている。

今年、八十九歳、八十六歳を迎える両親が、いつまでも元気でいるとは思えない。

母が戦後、満洲から引き揚げてきた話も、今聞いておかなければ、知らないままになってしまうことがあるだろう。

そう考えるうちに、私がここ天使突抜一丁目に暮らす中で、聞いたこと、体験したことを「おぼえ帖」として記しておきたいと思うようになった。

私が生徒として出会った、いろんな分野の先生方。また、自身が先生として出会った生徒さんのことなど、私の人生や日々の暮らしに力を与え、彩りを添えてくださる皆さんのことも、天使突抜をめぐるお話として綴ってみた。

こうして書いてみれば、使い続けたアルミの洗濯カゴが独特の味わいを醸し出すように、京都の下町暮らしもなかなかに味わい深いと思えるのだが、どうだろう。手前味噌に過ぎるだろうか。

装丁　谷本天志

本文写真　石川奈都子

JASRAC 出 2201963-201
©1984, Schott Music Co. Ltd. Tokyo

第一部　天使突抜の人々

照子さんの塩昆布

玄関を出る。
向こうから歩いてくるのは、藤田さんのボクだ。
彼は、見る度に背が伸びている。
つい最近まで、お姉ちゃんの後ろにくっついて歩いていたのに、いつの間にか立派な青年だ。
細身で長身、見上げるほどになった。

夏の盛り、すれ違いざまに彼は涼しげな笑顔で挨拶してくれた。
「こんにちは。暑いので、気をつけてください」

えっ。
若者に気遣(きづか)われた。
生まれた時から住んでいる「天使突抜一丁目」。
世代交代を感じた瞬間である。

天使突抜一丁目は、京都市下京区に実在する地名。

京都駅から北に、自転車で五分ほどのところだ。

「天使突破」と書き間違えられたり「てんしつつぬけ」と聞き間違えられたりするが、正しくは「てんしつきぬけ」である。

名刺交換した時など「素敵な住所ですね」と言われると、素直に嬉しい。

通崎家は第二次世界大戦の終盤、それまで住んでいた堀川五条の家が建物疎開で取り壊されることになり、すぐ近くのこの町内に引っ越してきた。その後、父が小学生の頃から、私が中学生になるまで、戦前に建てられた長屋に暮らしていた。

子どもの頃私は、よく「ばあばあ」と呼んでいた、向かいのおばあちゃん「細谷のおばちゃん」と連れだって、近くの銭湯「白山湯」に出かけた。

頬を寄せるとたぷたぷと気持ちがいい細谷のおばちゃんの二の腕を指して、「元禄袖みたいやな」と言うと、「うまいこと言うな」と大笑いになった。

元禄袖とは、子どもや女性の普段着に使われる短く丸い袖の形。

五十年近く前、天使突抜一丁目には、そういう言葉が自然に行き交う日常があった。

三つ年上の姉・有希子が高校生、私が中学生になると交友関係も広がってくる。友達に遊びに来てもらうにも、古い長屋はどうかと左京区あたりのマンションに住まいを移す話も出た。

しかし、結局は、同じ場所に家を建て直して住むことになった。

「天使突抜一丁目」というちょっと変わった町名は、隣の町内「天神前町」にある「五條天神社」に由来する。

五條天神社は、七九四（延暦十三）年、桓武天皇の平安京遷都の折に、大和国（現、奈良県）の宇陀郡から遷されたとされる。当初「天使社」「天使の宮」と呼ばれていたが、後鳥羽天皇の御世に「五條天神社」と改称された。天神というと菅原道真を連想するが、祭神は大巳貴命、少彦名命、天照皇大神の三柱。こちらは、「てんじん」ではなく「てんしん」と読む。

少彦名命は、「天子」と呼ばれた。しかし、天子は天皇を表わすので失礼だと考え「天使」とした、ともいわれている。

当初の五條天神社は「東西四丁、南北五丁」と非常に広い境内を持ち、清水寺などと共に平安京を守護していた。

現在は西洞院松原に位置する小さな神社だが、毎年節分には遠くからもお参りの人が訪れる。年に一度授与される日本最古の「宝船」の図を授かるためだ。船に稲穂を一束載せただけの簡素な船の図だが、毎日厄除け・病除けを祈願すれば、年中つつがなく過ごせるといわれる。

「天使突抜」は、天正年間末期（一五九〇年頃）に行なわれた、豊臣秀吉による京都の都市改革

「天正地割」で新しくできた道の一つ。天使社とも号された五條天神社の境内を突き抜けて作られたため、「天使突抜」と名付けられたといわれており、私自身も子どもの頃からそう聞かされてきた。しかし、最近気になって調べてみると、どうやらそれは確証のない通説らしいことを知った。

歴史地理学で「突抜」研究の第一人者・足利健亮は、『「突抜」考：歴史地理学的史料批判』（社会科学論集、一九八一年）で、「突抜」とは、既存の道の先を延長して別の道までを「突き抜いて」造られた道であると定義づける。

ちなみに、「突抜」はあくまでも「道」であり、その両側に家々が建ち並ぶことで「町」が成される。

足利は、一七六二（宝暦十二）年に著わされた『京町鑑』などをひもとき、近世京都、二十六の突抜の存在を導き出した。

「真如堂突抜」「常磐井殿突抜」「亀屋突抜」「大堀突抜」「仁王門突抜」「相国寺突抜（鹿苑院突抜）」「近衛突抜」「衣棚突抜」「木之下突抜」「釜座突抜」「天使突抜」「藤西突抜」「妙蓮寺突抜」「社突抜」「（寺内）突抜一・二丁目」「釈迦突抜」「甲斐守突抜（松の下町つきぬけ）」「突抜」「越後突抜」「大原口突抜」「御霊突抜」「志かやの突抜」「本能寺突抜」「骨屋町突抜」「みこく殿

突抜」「稲荷町突抜」

並べてみれば、圧巻だ。私は、京都に突抜のつく町名が天使突抜以外にもいくつかあることを知っていたが、これほどたくさんあるとは知らなかった。「衣棚突抜町」が「突抜町」、「骨屋町突抜」が「骨屋町」など略されているものもあるが、大半が現存する町名である。

そして、足利は、『小田原記』に記された一文から、天使突抜も含むほぼすべての「突抜」は、秀吉が都市改造を行なった地域から外れているため、秀吉の事業とは無関係であると結論づけた。「突抜」は、秀吉のような時の権力者の手で計画的に作られたものではなく、そこに住む町衆が、広範囲で、いわば場当たり的に作った市街地再開発の街路だとする。

これは、ちょっとした衝撃だ。

さらに、足利は当初から「天使突抜」ではなかった可能性も示唆する。

『寛永頃洛中絵図』（一六四二年）には、「天使突抜一丁目」ではなく、「天使壱（いち）町目」「天使弐（に）丁目」と記載されているのだ。「天使突抜一丁目」の北側にある、現在の「舟屋町」が、「天使つきぬけ舟屋町」と記されているので、何年かの間に「突抜」の名称が南に延びたのかもしれないという。今回、この本を書く過程で偶然目にした「洛中絵図」（左ページ。国際日本文化研究センター蔵、年代不詳）でも、現在の「舟屋町」が「天使ノ突抜」、「天使突抜一丁目」が「天使一丁目」

となっている。これも足利の説を裏付けるに足る資料ではないだろうか。
私は思わず、かつて故足利健亮が会長を務めた、一般社団法人人文地理学会に問い合わせてみたが、足利の論考以降、人文地理の分野で新しい研究結果は示されていない、とのことだった。
天使突抜には、いまだ解明されない謎が残るようで、想像力がかき立てられる。

さて、そんな天使突抜がどんなところか、と尋ねられたら、令和の今にも、自然なご近所づきあいが残る地域と答えるだろう。
一人暮らしのお家で数日留守になることがあれば、「ちょっと留守にするんでお願いします」と声がかかる。具体的に何を頼む、ということでもない。新聞を取り入れてなくても、洗濯物を干してなくても心配しないでくださいね、という程度のことだ。
また、思いがけない到来物があれば、お互い気軽にお裾分けをする。
一言でいうと、仲のよい町内というところだろうか。

つい先日、ロサンジェルスに住む悦ちゃんが、お母さんの住んでいた家を引き払うことになったと挨拶に来てくれた。
悦ちゃんとは、うちの三軒先のお姉ちゃん、旧姓山本悦子さん。
私は子どもの頃のままに「えっちゃん」と呼ぶが、悦子さんはすでに古稀を迎えている。
お母さんの家とは、山本照子さんが晩年まで過ごした、天使突抜一丁目の家だ。

照子さんのことを、私は「山本さんのおばちゃん」と呼んでいた。

一九二六（昭和元）年生まれの山本照子さんは、二〇一八（平成三十）年の暮れ、九十三歳で亡くなった。

悦ちゃんのお父さん・昭さんはすでに他界されていたが、照子さんは好んで一人で自宅に暮らし、完全自立を好んだ。ふわふわの白髪を整えて、いつも身ぎれいにされていた。社交的な人ではあったが、型にはまった集団行動がいやだと介護サービスは利用しなかった。

離れて住む息子さんや、近所の人が気に掛けてよくのぞいていることは知っていたが、私も気になって時々顔を出した。

弘法市（こうぼういち）に出ている八百屋で見つけた、むかご。昆布出汁に酒を足し、藻塩を多めに入れると、すっきりとした味に仕上がった。

こんな時は、いつもお茶碗一膳分をラップに包み、半紙を添えて、一人暮らしの照子さんに持って行く。ラップとは味気ないことだが、器に入れると、器と共に返ってくる「お返し」が心苦しいから、ラップにする。

「いやあ、懐かしいわ、むかごご飯や。いつもありがとう」

そんな声が聞けなくなって久しい。

夏に「とうもろこしご飯」を持って行けば「こんなん食べたことなかったわ。美味しいもんやなあ」と、喜んでくれる。新鮮なとうもろこしを実だけ庖丁でこそぎ落とす。味付けとしては、塩と酒を入れるだけの簡単なものだが、炊く時に芯も一緒に放り込むのがこつ。ここから旨みが出て味わいがひろがる。

揚げたてのコロッケなら近所で買うこともできるが、一人で暮らしていると、意外と味のついた炊きたてのご飯を食べる機会は少ないだろう。

筍（たけのこ）や松茸（まつたけ）など、特別な食材ではなくても、空豆や黒豆、里芋やさつまいも。何か楽しいご飯が、色よく美味しく仕上がれば、持って行った。

到来もののお菓子があれば、箱ごと持って出る。

「おばちゃん、お皿持ってきて」

「あんた、まためずらしいもん。いつもありがとう」

「好きなだけとって」というと「二つ、もらおかな」。

「三つでもいいよ」といっても「いや、三つは食べられへん。二つもろとく」。

小さなことにも意思のある人だった。

夏のある日、深夜近くになって救急車のサイレンが近づいてくるのが聞こえた。「あれっ、近くで止まったな」と思っていると、玄関のベルがなる。

普段私は三階にいるので、一階の両親が動けなくなって呼んだのではないかとドキドキとしながら階下へ降りた。

鍵を開けると、救急隊員に「山本さんの家の鍵、ありますか」と言われ、状況がわかった。

何かあった時のためにと、うちで山本さんの玄関の鍵を預かっていた。その何かが起こったらしい。照子さんは倒れて動けなくなったが、なんとか電話の受話器を掴(つか)んで一一九番した。救急車が到着したのはいいが、玄関まではたどり着けない。そこで、中から「通崎さんのところに鍵があるので、もらってきて外から開けて」と言ったのだろう。

照子さんは家の中から助け出されて病院に搬送された。

脳腫瘍と肺癌を患(わずら)っていたが、穏やかな進行なので、定期的に病院に通うだけで、積極的な治療はしていなかった。一度こけてから足腰が弱り体力が衰えているようだったが、それでも車椅子を使うこともなく健康そうに見えていた。

だから、私は突発的な大病を心配した。

しかし、診断の結果は熱中症だった。

その時は、幸い数日で退院することができたが、それからが早かった。

「お世話になりました」と、家族葬を終えた悦ちゃんが挨拶に来てくれた。

山本さんの家の玄関に近所の人が集まって、みんな口々に「おめでとう」「いってらっしゃい」

と言ってお嫁入りする悦ちゃんを賑やかに見送ったのは、もう四十年以上前のことだ。一九五一（昭和二十六）年生まれの横田悦子さんは、私が子どもの頃に結婚し、日本人のご主人と共に渡米。現在は、一男二女、そして孫にも恵まれ、アメリカに暮らしている。アメリカに住み始めた時は、学生の身分だったご主人だが、今は長男と通信衛星の部品を設計開発する会社を共同経営する。

悦ちゃんは、お母さんの死に目に会えなかった。

でも、悦ちゃんの弟さんに見守られて照子さんは、穏やかな最期だったそうだ。

悦ちゃんは、これまでも帰国する度「いつもお世話になってます」と顔をみせてくれたが、落ち着いて話す機会もなかった。しかし、今回は、ゆっくりと話ができた。

「ほんまに、おばちゃん、京都らしい人やったねえ。ご両親も京都の人？」と尋ねると、思いがけない答えが返ってきた。

「母はねえ、私からしたらすごくかわいそうな人。お父さんの顔も、お母さんの顔も知らはらへんの」

照子さんのお父さんは、紳士服の仕立てをする人だった。大正時代のことだから、随分ハイカラでおしゃれな人だったのだろう。しかし、照子さんが生まれてまもなく身体を壊し、家族で生まれ故郷の八木（やぎ）（現、京都府南丹市）に帰った。農家の家に入った照子さんのお母さんは、よほど

居づらかったのか「お薬もらってくるね」と家を出たまま行方不明になられた。その後、照子さんのお父さんも亡くなり、照子さんはひとりぼっちになってしまった。

そこに、現われたのが、血のつながりもない独身の女性だ。

「かわいそうな子がいるもんや」と言い、引き取って育ててくれた。そして、照子さんを連れて、大工の男性の元に嫁ぎ、京都市内に出てくることになった。

悦ちゃんからみたおばあちゃんは、手に職があるわけでも、何か特別な才能があるわけでもないごく普通の女性。見ず知らずの子どもを引き取って育てようというパワーがどこから出てきたのかわからない。そんな、か細い人だったそうだ。

一方、悦ちゃんのおじいちゃんは大酒飲みで、大工の仕事で稼いだお金はすべて飲み代に消えていった。

だから、照子さんは充分な教育を与えられたとは思えない。

しかし、小学校しか出ていなくても、読み書きそろばん、お裁縫も編み物も、よくできた。

悦ちゃんが、雑誌『なかよし』に載っているかわいいマントを着た女の子の写真を見て「私もこれが欲しい」というと、さっと作ってくれたそうだ。

照子さんは、近くに住む男性、山本昭さんと大恋愛の末、結婚した。

昭さんは若い頃、新聞社に勤務していた。周囲から「娘が嫁に行くとき、新聞社の肩書きがあ

ったほうがいい」と言われながら、脱サラして、天使突抜一丁目の自宅で家業の湯のしの仕事をした。湯のしとは、蒸気を当てて生地のシワを伸ばしたり、反物（たんもの）の幅を整える作業。まだ着物関係の仕事が潤っていた時分の話だ。

私は、悦ちゃんはお母さんゆずりの華やかなべっぴんさんに思うのだが、父の昭さんはよく「お母さんはきれいや、お前はわしに似て残念やな」と言っていたそうだ。

昭さんは、十人兄弟の末っ子である。昭さん家族は、十人の子どもを育て上げた昭さんの母、いちさんと一緒に住んだ。照子さんのお姑さんである、いちさんは、「よう働かはる分、口も達者」と、近所でも評判の気の強いしっかりもので、町内の人達は「照子さん、よう我慢しはった」と、口を揃えて言ったものだ。

悦ちゃんは、おばあちゃんのいちさんが踊り好きだったので、お稽古を始めるのによいと言われる六歳の六月六日、満四歳の六月六日に日本舞踊のお稽古を始めた。

悦ちゃんにとって、忘れられない出来事がある。

五條天神社での、踊りの会に出演することになった、五歳の時のこと。

リハーサルである下ざらえがうまくいかなかった。

おばあちゃんからは「私は、本番行きません。あんな下手なの恥ずかしゅうて、私は顔出せへん」と叱られる。

手をついて頭を下げ「お首も曲げます。お腰もおります。観に来てください」とお願いして、

やっと観に来てもらった。気合いが入ったのか、本番はうまくいき、「ようがんばったなあ」と褒めてもらった。それを機会に悦ちゃんの踊りは上達し、若柳流師範の免状をもらうまでになった。

二十三歳で結婚、渡米時には扇一本持って行っただけで、踊りを続けるつもりはなかったが、五十五歳になった時、後悔しないかと考え、改めてロサンジェルスで出会った坂東三津拡師に入門した。三津拡師は、坂東流の家元から直接指導を受けた直門、ロサンジェルスで四十年にわたり日本舞踊を教えてきたが、二〇一六年に逝去している。

悦ちゃんは、坂東拡三也の名前で活動。スタジオを借りて改装し、松の木で本格的な舞台も作った。現在は、日本人中心三十名のお弟子さんにお稽古をつけ、彼の地で日本文化の継承に励んでいる。いずれ東京で、坂東流師範の免状をもらう予定だ。

振り返れば、五歳の時にかけられたおばあちゃんの厳しい一言が、現在の踊りと共にある心豊かな生活に繋がっているのだろう。

ところで、照子さんといえば、忘れられないのが塩昆布の味だ。

悦ちゃんに「おばちゃんが、時々持って来てくれはった塩昆布は、ほんまに美味しかったわ」と言うと、悦ちゃんは「私もあの味は、心にも身体にも残っている」と言った。

八百屋さんに「ええ蕗と山椒が出たら、おいといて」と、頼んで仕入れてもらう。よいものが入ったタイミングで、いつもより身の厚い上等の昆布で塩昆布を炊く。季節によって、筍や椎茸

が入っていたがどれも極上の品だった。
食材ひとつずつを吟味して作った塩昆布は、京都の下町で背筋を伸ばして生きてきた照子さんの人柄と同じように、素朴で優しく、凛(りん)とした味がした。

住む人がいなくなり、山本さんはお宅を引き払われることになった。
馴染みのお家がなくなるのは寂しいが、そのうちまた新しい家族が引っ越して来られるだろう。あるいは、ここ数年急激に増えたゲストハウスになるのかもしれない。

我が町内は、八〇年代のバブルの頃から新旧入れ替わりが激しくなった。
新しく町内に来られた中で一番親しいのは、はす向かいの大澤さんだろうか。
二十年ほど前に引っ越してこられた時は、今は亡きおばちゃんの久子さんと長男の壽(ひさし)さん、妻の佳代子さんに、長男、長女の五人家族だった。
スポーツ好きのご主人が社交的だったこと、また佳代子さんがとてもセンスのよい着物地の洋服を作っておられることをきっかけに話も弾み、親しくお付き合いするようになった。

大澤家は、元々御池通に自宅があったが、うちと同様、第二次世界大戦中の建物疎開で立ち退きを余儀なくされ、烏丸(からすま)松原近く、新玉津島(にいたまつしま)神社の隣に家を借りて住まわれていた。
新玉津島神社とは、藤原定家(ていか)の父で、平安時代末期から鎌倉時代初期を代表する歌人・藤原

俊成が、和歌山県若歌浦の玉津島神社に祀られている和歌の神様、衣通姫尊の分霊を勧請して邸内に創建した神社だ。

その由緒ある神社の隣、すなわち大澤さん宅にマンションが建つことになり、二十年前、うちのはす向かいの土地を買って家を建て引っ越してこられた。

ある日、佳代子さんから「お人形の着物できたから、見てくれる？」と声がかかった。

お人形とは、姑の久子さんが自身の初節句の時に贈られた、すなわち百年前のお人形だ。

百歳のお祝いに、おばあちゃんが大切にしているお人形の着物を新調してプレゼントするのだという。

久子さんは一九一九（大正八）年、縮緬の白生地問屋を営む中京区の家で生まれた。

祇園祭では「八幡山」の山鉾が建つ、京都の中でもとりわけ京都らしい地域である。

かつて、実家の当主は、八幡山保存会の理事長を務められていた。

久子さんは、子どもの頃、男衆さんが蔵から出して準備した祇園祭の屏風飾りの前に、ちょこんと座っていたのを覚えていると話しておられたそうだ。

姉一人、兄二人の末っ子。幼少時、身体が弱く、よくお女中さんと右京区鳴滝の別荘で過ごしたというエピソードからも、久子さんのお嬢さまぶりがわかる。

久子さんのお人形は手足の関節が動く抱き人形のスタイル。顔の表情は大変愛らしく、手指のニュアンスにも女の子らしい優しさが溢れる。着物を脱がせると、チョンとかわいらしいおっぱいまで付いた精巧なものである。

胴に巻かれた、柔らかい和紙には「京人形細工司・伊東久重（いとうひさしげ）　高倉通四條南入西側」とあり、この人形が伊東家謹製のものだとわかる。

伊東家とは、江戸時代中期、享保年間（一七一六～一七三六）から続く、御所人形を制作する家筋。一七六七（明和四）年に、後桜町（ごさくらまち）天皇から「伊東久重」の名を拝領し、現当主が十二世となる。時代からすると、久子さんのお人形は九世作になるだろう。

久子さんの人形は長く実家の蔵にしまわれていたが、ある時兄嫁さんが「これ、久子さんのやし」と持って来てくださったそうだ。

久子さんの子どもは男三人。飾る機会もなかったが、長男の壽さんが佳代子さんと結婚し、長女実登里（みどり）さんが誕生した。孫の初節句の際、「これも飾って」と箱から出してこられ、佳代子さんは人形の存在を知ることになった。

久子さんの九十九歳の誕生日には、入居する京都市内のグループホームに親族一同が集まり、盛大に白寿のお祝いを開いた。この時、佳代子さんは、白い帯地を使って、大黒頭巾（だいこくずきん）とちゃんちゃんこを製作。さて、百歳のお祝いは、と考え、大切なお人形の着物を新調することを思いつい

た。

今も、大澤家には、人形が作られた当時に着ていたオリジナルの着物が残る。水色とピンクの絞りで、着物の上に羽織る被布も付いた可愛らしいものである。

その後、この着物が古くなったからと、久子さん自身が人形の着物を誂えた。佳代子さんと一緒に買い物に行って選んだという赤い友禅地だ。ここには、白い綿地に「平成十二年六月一日大沢久子謹製」とペン書きされた布が縫い付けられている。

お人形の箱には、伊東久重さんの海外初個展を紹介する記事など、切り抜きが入っている。久子さんは、伊東久重の名前が目に付いたら切り抜いておられたようだ。両親から贈られた人形に、特別な思いがあったのだろう。

佳代子さんは、今回着物を新調するにあたり、製作は知り合いに依頼するつもりだった。しかし、あてにしていた方の都合が合わず、久子さん製の着物をお手本にして、自身で作ることにした。

半襦袢とおこしは、当時のものを活かしてそのまま使う。

長襦袢もお人形が着ていたものを活用し、着物と帯、それに似合う帯揚げと帯締めを新調することにした。

使った生地は、洋服作りのためのストックから、人形が作られた当時の縮緬地を選んだ。青みの強い紫地に、菊、桜、松、楓、そして鼓や御所車があでやかに描かれる子ども用の着物。帯も同じ時代の落ち着いた薄い茶色の帯地で製作した。着物の裏地にも、同じ時代の紅絹を使う。古い生地独特の柔らかく軽やかな手触りで、年代物のお人形の身体によく馴染む素敵な仕上がりとなった。

私には一つ、素朴な疑問があった。

どこの家にも、嫁姑問題がある。

昭和二十年生まれ、佳代子さんのご主人、壽さんは、がっしりとしたよい体格の持ち主だったが癌を患い、十年ほど前に他界された。

遺された佳代子さんは、お姑さんである久子さんのお世話をし、嬉々としてお手製のお祝いの品を用意する。

こちらの嫁姑はたいそう仲がよい。

三人の男の子を育て上げた久子さんにとって、長男の嫁である佳代子さんは、待望の「女の子」だった。嫁というよりは、娘のようにかわいがってくださったそうだ。

二人は近所の同じ美容院に通っていた。佳代子さんは、ある時美容師さんから、「たいてい、姑さんはお嫁さんの、お嫁さんは姑さんの愚痴を言う。しかし、久子さんからは、そんな話を一

言も聞いたことがなかった」と聞いた。

他人が同じ屋根の下に暮らせば、大なり小なりなんらかの不満もあるだろう。しかし、お互いが己をわきまえ、賢く、気持ちよく過ごせば、波風は立たない。

そんな心持ちがあってこそ、このお人形が受け継がれていくのだろう。

久子さんは二〇二一（令和三）年、百一歳、老衰で亡くなった。

お線香をあげさせてもらいにお家にうかがうと、久子さんの祭壇の前には、お人形が飾られていた。

着物をみせてもらった際、佳代子さんは、お人形の足の部分の塗りが剝離（はくり）していることを、気にされていた。

「この剝（は）がれたところ、なおるやろか」と言いながら、お人形の足の傷をさすっていた佳代子さんだったが、その後、思いついてお人形さん用の足袋を作って履かせたのだそうだ。

私は以前、お節介にも、この人形を完全に修復しようと思うとどれくらいかかるのか、人形屋さんに問い合わせてみたのだが、おそらく三十万円はかかるだろうということだった。

佳代子さんの、足袋を作って履かせるアイディアは、高価な修繕に勝るとも劣らない。

きっと久子さんも喜んでおられるだろうと思いながら、穏やかな表情の遺影に目をやった。

大澤さんのお宅は、紙を扱う仕事で、息子の倫明（みちあき）さんが跡を継いでおられる。

もともと、このあたりは、京都らしい仕事をしているおうちが多かった。

我が家は、和装小物縫製業。主に扱うのは風呂敷。母が反物の裁断をし、父が縫製をして、風呂敷の仕上げ工程を担う。

北隣のおじさんは「配膳さん」、その隣は「悉皆屋さん」だった。

「配膳さん」とは、茶事、宴席、儀式、呉服問屋の催事など、準備から当日の進行までを裏方として取り仕切る、京都にだけ存在する男性の仕事。一言でいえば、もてなしのプロフェッショナルだ。

「悉皆屋」は、顧客から着物のシミ落とし、仕立て替え、染めかえ、などを請け負って、適材適所の職人さんに仕事を委ねる。悉皆の「悉」は、「悉く」という意味。悉皆屋さんは、呉服のことなら皆、悉く、なんでも相談に乗ってくれる。

南隣は「裁縫塾」。

私の子どもの頃、昭和五十年代の最盛期は、五十名を超える塾生がおられたが、今は裁縫教授ではなく、仕立て屋さんとして続いている。

巣立っていった人達から「先生」と慕われる、鳥野久恵さんは「和服仕立」の分野で、平成十六年京都府「現代の名工」に選ばれた仕立て師だ。

この裁縫塾は、月謝を納めて習う教室ではなく、塾生が住み込みで、お給料をもらいながら技

術を身につけていく。

往時、京都にはこのスタイルの裁縫塾が八十軒ほどあったと聞くが、お隣の「新生裁縫塾」の前身「新生和裁女学院」の創立は一九三〇（昭和五）年。多くの裁縫塾の中でも老舗だった。

あるとき、この塾で六年を過ごした「みわちゃん」からお手紙をもらったことがある。

「大変ご無沙汰しています。覚えてもらっているかしら、と思いつつやっぱりペンを取ろうと思いました」と始まる。

三重県出身のみわちゃんは、子どもの頃から針を持つのが好きだったので、高校の進路指導で目にとまった和裁の仕事に就くことにした。

彼女は、数ある和裁塾の中から、近代的な寮の施設が整ったところではなく、六～八人が一部屋で寝泊まりする新生裁縫塾を選んだ。お茶やお花、着付けのお稽古ができることも魅力だったし、手入れの行き届いた京都らしい庭にも憧れた。

朝は掃除に始まる。

「押し入れからお客さんが入ってきても恥ずかしくないように」と厳しかった。

一年生の仕事は、反物の難探（なん）しから。そしてひたすら運針の練習をする。

少しずつ、長襦袢の袖など表に出ないところを縫わせてもらえるようになり、やがてはお客さんから預かった着物を担当することになった。

一人前に着物が縫えるようになると、固定給が歩合給になる。
むずかしい着物は仕立代も高額だ。先生に信頼され、そのような着物を任せられるようになると、お給料が上がる。そのうちに、和気藹々と給料明細を見せ合うようなこともなくなる。
唯一休みの日曜日も門限は五時。
住み込みの生活は息苦しいことも多かった。
私も子どもの頃、うちの家の前にあった公衆電話で、泣きながらお母さんに電話をしていたお姉さん達の姿をよく見かけたものだ。

さて、お便りの趣旨はこうである。
クラリネットを吹くようになった中学生の娘とコンサートに出かけた帰り道に、ふと私のことを思い出した。
あの当時は、朝八時から夜九時まで針を持って一心に仕事をした。
集中するために、ＢＧＭはない。
黙々と手を動かしている時、隣の家から私のマリンバが漏れ聞こえてきた。
おそらく、私はできないところばかりを何百回と繰り返していたのだろう。
そんな時、みわちゃんは「隣のお姉ちゃんもがんばっている、私もがんばろう」と思ったのだそうだ。
手紙には「六年間の日々、その音色に助けられたにもかかわらずお礼さえいえていなかったこ

とに気付きました」としたためられていた。

窓は二重にしているが、家は木造、完全な防音室ではないので、外まで音が漏れる。地域によっては「騒音」と眉をひそめられるのだろうが、天使突抜一丁目の皆さんは「生活音」として受け入れてくださっている。ありがたいことだ。

天使突抜一丁目、一戸建て三十戸ほど。マンション四棟に、駐車場が四つ。古くから住む家は、三分の一ほどになった。

思えば、天使突抜一丁目の由来となった五條天神社も代が替わり、二〇一七年からは、一九五八年生まれの佐々部昭一さんが宮司を務めておられる。

二〇一〇（平成二十二）年、私は自宅向かいの路地にある四軒長屋の一番奥の家が売りに出たので、倉庫代わりに手に入れた。築年不詳、再建築不可の小さな物件だ。美術関係の友人らに、柱など一部の構造だけを残してリノヴェーションしてもらった。その工事の前、お祓いをしてくださったのが、昭一さんだった。

私は、宮司を務めておられたお父さんがご病気であることを知らずに、お祓いの依頼に出向いた。奥さまが、「身体が自由にならないので、親しくしている神社を御紹介します」と申し出てくださったのだが、どうしても地縁のある五條天神社にお祓いをお願いしたい。

そこで、私はたまたま帰省しておられた昭一さんを見つけ、息子さんにお願いできないかと頼

んでみた。

昭一さんは、当時、まだ東京在住でＩＴに関するコンサルティングのお仕事をされていた。少しずつ神職の引き継ぎはしているが、大きな祭礼の経験はあれども、祭事の経験はないという。

私は、「誰でも初めてということはありますから」と口説き、昭一さんにとって「初めての祝詞（のりと）」をあげてもらった。

平安時代から続く神社、当代宮司の初祭事がうちの長屋の「清祓（きよはらい）」だったということは、ちょっとした自慢である。

私は、結婚もせず実家に居座り、まもなく五十五歳を迎える。

最近は特に、町の変化や世代交代を感じながら過ごしている。だからといって、この地の歴史の中に生きているような気がする、というのはまだまだ厚かましいだろうか。

国立公園 比叡山
回転展望閣入閣記念
1972年8月

花売りのおばさん

母校の京都市立醒泉小学校は、統合してその名前がなくなったものの、京都市立下京雅小学校となって同じ醒ケ井通松原下ルにある。一方、私も通った市立楊梅幼稚園は、移転したが同じ名前で下京雅小学校の隣に健在だ。

両者の正門がある醒ケ井通を歩いていると、下京雅小の敷地内に、これまで気が付かなかった「三善清行邸跡」の石碑が目に入った。新校舎の工事で、目に付きやすいところに移動したのだろう。

三善清行とは、どこかで聞いたことのある名前だが、さて誰だったか。

家に帰って、調べてみると、三善清行（八四七～九一八）は、平安時代前期の漢詩、漢文に優れた文人官吏であることがわかった。下級貴族の子に生まれたが、学問に励み、文章博士を経て七十一歳で参議、宮内卿となり、公卿に列している。

九一四（延喜十四）年、醍醐天皇に対して、政治意見書「意見十二箇条」を提出、鋭い洞察で政治の欠陥を見抜き、中央財源の不足を補う方法を進言した。当時の辣腕政治家である。

三善清行のことを調べていると、ふと「化け物屋敷」の話を思い出した。

以前、歴史に明るい友人と、平安時代の五条通は現在の松原通にあたるという話をしていたと

き、友人から『今昔物語集』にある、清行の堀川五条の屋敷の話を聞いたのだった。

『今昔物語集』第二十七巻第三十一話には、こうある。

三善清行という人物が、縁起が悪いからと誰も住んでいなかった堀川五条の荒れた屋敷を購入した。

庭には、大きな松、楓、桜などがあり、そこには樹神が住んでいるように思われたが、蔦が這い回り、苔がむし、いつ掃いたかもわからない。清行が、五間（約九メートル）四方の寝殿に一人眠っていると、天井の格子の一升ごとに顔が見える。騒がずにいると、消え失せたが、今度は身の丈一尺（三十センチ）ほどの四、五十人が馬に乗って邸の中を西から東に通っていく。気品に満ちた、しかし扇で隠した顔には銀の牙を持つ女までもが現われる。ついに、浅黄の上下を着た翁が、手紙を持って現われ「私どもは長年ここに住んでおります。あなたさまがお住まいになると困るのです」と訴えた。清行は、自身は手続きを踏んでこの家にやってきた。手続きを無視して人を脅かし家を占拠するのはまったく非道なことだと論破する。結果、翁は一族を引き連れ、〈大学寮の南門の東の脇の空き地〉に移ることになった。

その後、家を改築して住まうことになるが、奇妙なことは起こらなかった。

『今昔物語集』の作者は「心賢く智のある人には、物の怪も悪事は働けないものだ」という教訓を述べて、この物語を終えている。

その清行が暮らした屋敷跡は、まさに、現在の京都市立下京雅小学校の地だ。

この碑の前を通る度、清行が物の怪を追い払ってくれたおかげで、私は健やかな小学校生活を送れたのだろう、と平安時代に思いを馳せている。

頭の中で、もう一つ、京都ではよく知られる「戻り橋」のエピソードが繋がった。

九一八（延喜十八）年、清行が亡くなった時、天台宗の僧侶である息子の浄蔵は、修行のため紀州熊野にいた。いわゆる大峯入りであるが、父の訃報を聞き京都に戻ったところ、父の葬列は、堀川に架けられた一条大路の「土御門橋」を渡るところだった。後に陰陽師の安倍晴明を祀る晴明神社が創建された場所のそばの橋だ。

浄蔵が、別れを告げられなかったことを悲しみ祈願したところ、清行は一時蘇生し、父子は抱き合うことになる。作者不詳、鎌倉時代の仏教説話『撰集抄』第七巻にあるこの伝説から、一条の橋はあの世からこの世に戻る「一条戻り橋」と名付けられたという。

浄蔵は、加持祈禱にすぐれた人物で、神通力によって八坂にある法観寺の五重塔の傾きを直したなど、さまざまな奇跡のエピソードを遺している。

ここで、あっ、そうか、と気付く。

祇園祭の山鉾三十三基の一基、室町通蛸薬師下ルに建つ「山伏山」。

この山には、左手に刺高数珠、右手に斧を持ち腰には法螺貝を付けた、ご神体である人形が飾られる。この山伏姿の人形こそ、大峯入りする浄蔵の姿なのである。

半世紀以上、祇園祭を見続けているが、恥ずかしながら山伏山のご神体は「山伏さん」としか認識していなかった。

調べてみると、多くの平安貴族がそうであったように、三善清行も郊外、現在の左京区北白川に別荘を持っていた。

清行は、このあたりに咲く花がきれいなので、御所に献上してはどうかと勧める。これが、京都の町で花を売り歩く白川女の始まりといわれている。

京都の町を行商する女性の仕事としては、白川の花を売る「白川女」、薪や炭を売る、大原の里の「大原女」、白い布を頭に巻いて木桶を持って鮎や瓜、飴などを売り歩いた桂の里に住む「桂女」、この三種が時代祭にも参列する有名どころ。

ほかに、林業の盛んな梅ヵ畑方面から、梯子やくらかけ（脚立）など、間伐材で作った木工品を売る「畑の姥」、木の芽炊きや、山椒の樹皮の佃煮辛皮を売る「鞍馬女」、金魚やキリギリスを売る「出雲路女」などがあげられる。

白川女が、頭の上の籠に花を載せて「花、いらんかえー」と売り歩くのは、どこか優雅な雰囲

気がある。しかし、畑の姥が頭の上に自身の身長よりも長い床几など木工品を載せて歩く姿は、写真で見ても、想像を絶する重労働だ。

私が子どもの頃、昭和四十年代は、農家が直接野菜を売り歩く「振り売り」や「御用聞き」がめずらしくなかった。

「桂女」と直接関係はないが、私が小学校に上がるくらいまでだろうか、桂大橋のあたりから、桂善というお百姓さんがうちに野菜を届けていた。父によれば、戦前から続いていたらしい。

両親に言わせると「『桂の橋越えたら、甘みがちゃう』ってよう言うたはったなあ」となる。桂の橋とは、桂川に掛かる桂大橋のことだ。橋を越えたところには、和菓子で有名な明治十六年創業の中村軒があり、その先に桂離宮がある。

桂善のおじさんは、注文を聞くわけでもなく、季節のものを持って来て置いて帰る。「通」と書いた通い帳に、届けた物がそのつど記されるが、支払いは盆暮れの二回。父は「がばっと届いた水菜をぬか漬けにして、二ヵ月、三ヵ月と、食べたわ。色が変わって古漬けになったら、細かく刻んでご飯にまぶして食べたなあ」と、懐かしげに話す。

母が嫁いできた頃の思い出。「いつも、なんか、置いて帰らはんねん。秋には、かごに、大きいのやら、小さいのやら、切れ端やら、松茸がどさっときて。すきやきとか色々作って食べて。最後は、おじいちゃんに『松茸入れて塩昆布炊いて』って言われて塩昆布炊いたわ」という。とにかく、どさっとか、がばっ、と届いたらしい。私は日々の野菜について、ほとんど覚えていな

いが、年末に沢庵が大きな樽ごと届いたのを覚えている。

父が若い頃、桂善は、何年かに一度桂川に船を出して投網をうち、船の上で顧客に川魚の天ぷらを振る舞ったそうだ。

そう聞けば、桂の鮎を売り歩いた、桂女とどこか通じ合うような話である。

いくつかある女性の行商の中で、最近まで仕事を続けていたのが京都市左京区北白川に住む、花売りの白川女ではないだろうか。

例えば、上京の京染屋の娘の恋を描いた映画、山本富士子主演『夜の河』（一九五六年）には、白川女が姿を見せる。花を頭に載せた白川女が京都の町に溶け込んでいるので、昭和三十年代はごく日常的なものだったはずだ。

私は、白川女といえば「白川の花は御所の御使い花やったから、天皇陛下のご成婚の時は、私らも御所に招待されたんえ」と誇らしげに話してくれた西村多美さんのことを思い出す。

来られなくなって二十年近くなるだろうか。西村さんは私が生まれる前から約半世紀にわたり、月に二度うちにお花を届けてくださった。うちが買うのは、仏壇に供える御仏花と神棚の榊一対。私にとっては、物心ついてから、三十代までの出来事だから、しっかりと記憶にある。

「お花ですー」とお得意さんを一軒ずつまわる。

白川女は「花いらんかえー」と言って売り歩くといわれるが、お得意さんにむけて、その台詞

はない。

花と番茶を載せた荷車をひいた西村さんの気配を感じると、奥から急いでお金を持って出る。手にした三つほどの御仏花から好きなものを選ぶのだが、大差はない。菊のつぼみの開き具合程度のことか。こちらが出なければ、玄関にいつもの御仏花と神棚用のお榊がポンと置かれている。慌てて外に出て、西村さんにお代を渡す。

西村さんは、一九五五（昭和三十）年、滋賀県から北白川に嫁いできて、白川女だったお姑さんに教わりながらこの仕事を始めた。昭和初期には三百人ほどだった白川女も、平成の半ばでもう十人ほどになったと聞いた。

北白川から歩き通しではなく、どこかの地点まで息子さんの車に乗せてもらい、販売地域を荷車で歩く。白川女という風俗を保存しなければならないと気負う風はなく、歩くのは健康にもいいし、それに待っている人がいてくれるから続けていると話していた西村さんは、約二十年前で七十歳を過ぎていた。

藤原定家の歌と伝えられる「春といえば　冴えゆく風に　立つ浪の　花にうつめる　白川の里」が染められた手ぬぐいを頭に被り、紺木綿の絣の着物に三幅の前垂れを付ける。白川女の服装は白足袋と脚絆に鞋履きなど細かい決まりがある。しかし、西村さんの足元からのぞくのは、ジーンズとスニーカー。無理しないことが続ける秘訣なのだろうと、むしろ私にはかわいらしく

みえた。

ひところ白川女として、よくメディアに登場していたのは、一九一二（大正元）年生まれの田中くめさんだ。たしか、九十代になってもまだ白川女の仕事をされていたのではないだろうか。

くめさんは、白川女である母の姿を見て育った。嫁ぎ先の義母、義姉も白川女。重労働であるこの仕事はしなくてよいという約束で結婚したが、そういうわけにもいかず、白川女の仕事を覚えることになった。くめさんの夫は、太平洋戦争で帰らぬ人となり、くめさんが、白川女の仕事で家計を支えた。

そもそもは、白川の花、そして茶を栽培して番茶を作り販売していたが、戦後は、仕入れた花を御仏花用に束ね、そして番茶も茶葉は仕入れて煎る作業のみ行なうスタイルに変わっていく。

かつて、京都では一日と十五日が職人の休みの日で、この日に神仏に花を供え、手を合わせたという。そんなこともあり、現在でも一日と十五日に御仏花を買う家が多い。だから、白川女もこの日に合わせて町に出る。

同志社大学西村卓ゼミナール編『京の庶民史　伝統と技に学ぶフィールドワーク』（かもがわ出版、一九九九年）によると、一九九二年、くめさん八十歳の年で、顧客数は四百軒以上。毎月の一日と十五日、それぞれの前三日をかけて各戸をまわっている。

今出川通りより少し南、鴨川に架かる荒神橋をスタート地点として、日によって、南北の通り

を、寺町通、御幸町通、麩屋町通と変えながら、七条通、東本願寺の辺りまで足を延ばす。白川女にはそれぞれの顧客があるので、決まった道を通ることになる。

寄り道せずにさっさと歩いて一時間ほどの距離。早朝から歩き始め、時には親しい家でお茶などをよばれながら、夕方五時頃に終わる。そうすると、運送屋に連絡して迎えにきてもらい、大八車をトラックに載せて、くめさんも一緒に帰途についた。

スーパーや近所の花屋で買えるようになっても、昔からの京都の町の人は、白川女から花を買っていた。

しかし、最近は回ってこられることもない。

ビジネスマンも多く行き交う四条烏丸近くで花屋を始めた友人は、お洒落な花屋を目指して最初は御仏花を置かずにいた。しかし、要望に応え、榊と御仏花を置くようになって、古くから住んでいるご近所の方とのお付き合いができ、お客さんの層が広がったと話していた。

そんな風に、白川女のことを調べていると、左京区北白川仕伏町の北白川天神宮内に白川女風俗保存会によって一九六三（昭和三十八）年に建立された白川女の碑があることを知った。そう古いものでもないが、一度見に行ってみようと訪れた。

北白川周辺は京都大学に近く、特に戦後は大学の先生が多く住まわれている。例えば、京都大学教授、国立民族学博物館初代館長を務めた梅棹忠夫は、一九四九（昭和二十四）年、生まれ育

った西陣から北白川の古民家に移っている。

私の知人も何人か北白川にいるので、知らない土地ではないが、この神社の存在は知らずにいた。

北白川天神宮は、銀閣寺から北に歩いて十五分ほど、住宅街を抜けた白川沿い、千古山の山麓にある。

北白川は「北白川遺跡群」と呼ばれる縄文遺跡が発掘されていることから、一万年前から集落が営まれていたとされる。龍安寺や桂離宮の庭、二条城、そして元開智小の石塀など歴史的建造物に多く使われている白川石でも知られる。昭和になって石切場は閉山されるが、最盛期には二百人もの石工がいたという。

一八九四（明治二十七）年に架橋されたという白川にかかる北白川天神宮前の石橋、白川萬世橋の擬宝珠の菊花文、雪輪文の柔らかな曲線の意匠と細工は、往時を偲ばせる。

江戸時代初期に造立された石の鳥居をくぐると、手水舎の手前に円形の「花塚」と彫られた石碑に並び、立派な白川女の顕彰碑があった。

視線は、先にそびえる石段に向かう。

百三十三段を登り切ると、視界が開け、社殿や拝殿が拝めた。

京都市による案内板をみて、ハタと気付く。

この天神宮は、「てんじんぐう」ではなく「てんしんぐう」と読むようだ。それなら、私の住む天使突抜一丁目の名前の由来となっている、五條天神社と同じではないか。

京都市による案内板によれば、

ここに延喜以前より天使大明神と唱え、我国病気平癒健康長寿の神少彦名命が祀られていた。

やはり、祀られているのは、天神から連想する菅原道真ではなく、五條天神社と同じ少彦名命だ。

そして、次のように続く。

八代将軍義政公が文明年間、東山山荘造営に際し、今の千古山明神の森に遷座された。

北白川天神宮は、天使大明神（天使社）として、平安京ができる以前八世紀前半、現在地より南西の白川村の久保田の森にあったそうだ。室町時代、八代将軍・足利義政が東山山荘、つまり銀閣寺の造営中、久保田の森の天使大明神を現在地に移した。

銀閣寺の造営に注力した義政が、銀閣寺のすぐ北に位置し、都の鬼門にあたる北白川の地を重

要視したとみれば頷ける話だ。

義政が久保田のあたりを通る度、馬がいななき足が止まる。ここに神威を感じ取って見つけた祠を、都の鬼門にあたる現在の場所に移して祀ったという伝承もある。

江戸時代、寛文年間（一六六一～一六七三）に照高院宮第五代、道晃入道親王が「天使大明神」から「天神宮」へ改称し祈願所とし、今に至っている。

それにしても、京都には、まだまだ知らないことがあるものだ。

私を北白川に誘ってくれたのは、元醒泉小の場所に居を構えた三善清行だろうか。あるいは、醒泉小近く、佐女牛井の名水を好んだ足利義政だろうか。

思えば、うちのすぐ近くの銭湯をまっすぐいけば「道元禅師示寂聖地」、五條天神社のそばの八百屋「八百竹」の向かい、光圓寺には「親鸞聖人御入滅之地」、いつも手紙を入れに行くポストの前には、「山本亡羊読書室旧蹟」。山本亡羊は、江戸時代後期の医者、儒学者、本草学者で、ここには今も子孫が暮らす。少し足を延ばして四条西洞院まで行けば、小野小町の「化粧水」など、いろんな石碑に出会う。

江戸はもとより平安時代までも手の届くことのように感じさせてくれる。それが、京都の面白いところだろう。

奥方のレッスン

初めて生徒を持ったのは、大学に入ってすぐの頃だっただろうか。生徒のお母さんから成人式のお祝いをいただいたことを覚えているので、マリンバを教え始めたのは十代の終わりに違いない。

当時は、生徒の家に訪問する、出張レッスンをしていた。

最初の生徒は、山科区在住の早苗ちゃん。三条京阪から大津方面に向かう京阪電車がまだ路面を走っていた時代のこと。お宅は、京阪山科駅から十分ほど歩いたところにあった。聡明な小学生の女の子で、教えるのになんの苦労もなかった。高校生くらいまでレッスンをしていただろうか。

続いて教えることになったのは、左京区岩倉に住む絵里香ちゃん。こちらも今は地下鉄を使えば三十分強の距離だが、当時は地下鉄が岩倉方面まで延伸されておらず、一時間ほど市バスに揺られて通った。

絵里香ちゃんは当初幼稚園児だったはずだ。

お母さんから、外国に行っても通じやすいようにエリカと名付けたと聞いた。お父さんは「ね

ぎ」の研究をしておられるとうかがい、ほのぼのとした気分になった。

お父さんの仕事の都合で宮崎に引っ越され、レッスンは途絶えてしまった。調べてみれば、絵里香ちゃんの父・位田晴久さんは、宮崎大学農学部の教授として多くの業績をあげ、二〇一六（平成二十八）年に退職されている。絵里香ちゃんと顔を合わせることはなかったが、ずっと年賀状のやりとりをしており、彼女が関西の大学に進学し、その後結婚したことは知っていた。

数年前、三十代になった絵里香ちゃんがお母さんと共に、コンサートを聴きにきてくれ再会。変わらぬ愛らしい笑顔と、お母さんそっくりになった、畳みかけるような口調に、当時の事が懐かしく思い出された。

そんな風に、当初は子ども中心に教えていたが、そのうち、音楽大学の受験生を教えることになる。特に看板をあげていたわけでもないが、人づてに問い合わせてこられた。

母校の京都市立芸術大学音楽学部の定員はその頃、作曲、指揮、ピアノ、声楽、弦楽器、管・打楽器の各専攻を合わせて六十名。管・打楽器には、フルート、クラリネットなどの木管楽器、トランペット、トロンボーンなど金管楽器、そして打楽器が含まれる。ちなみに、打楽器科とマリンバ科が分かれている大学もあるが、京都芸大では、打楽器科に入学すると、小太鼓、ティンパニ、トライアングル、カスタネットなどの打楽器から、マリンバをはじめとする鍵盤打楽器まで、叩く楽器すべてを勉強する。

「管・打楽専攻」の枠は十五名ほどなので、かなりの狭き門となる。打楽器での合格者は、少な

ければ一名、多くて三名。受験生は毎年十名ほどだろうか。

自分自身がまだ芸大生にもかかわらず、受験生を教えることになった私は「合格させなければ」という気持ちの強い、かなり怖い先生だったと思う。練習法も含め、自分の知っていることをすべて伝授しているのだから、うまく弾けないのは努力不足、と決めつけていたところがあった。

現在、三人の子育てをしている元生徒に「子どもが夜泣きをして大変だった時も、先生のレッスンを思い出したら耐えられました」と言われ、そんなに大変な目に遭わせていたのかと愕然としたことがある。

クラシック音楽の個人レッスンは、私も含め、月謝制ではなく、一回ごと先生にレッスン代を渡すシステムにしている場合が多い。先生のスケジュールが流動的なので曜日を固定するのがむずかしいからだ。レッスンの度に、次のレッスン日を決めて帰る。

そんな、一期一会的なやりとりだったこともあり「練習しないなら、いつでも辞めてください」という態度でいた。

義務教育の「学校」なら、先生から逃れられないという面があるが、プライヴェートのレッスンはもっと自由な場だ。だから「他の先生につきたければ、紹介してあげるよ」とも言っていた。これは、生徒を抱え込まないという姿勢の表明であり、良心的なつもりだったが、生徒は違う受け取り方をしていたのかもしれない。

音大の受験生は、受験する大学の先生のレッスンを受ける人が多い。あるいは、その先生の流派のようなものがあって、そこに通う。そのうち、京都芸大の教授が替わり、新しい流派のようなものが定着してくると、私のところに受験生がやってくることもなくなった。

少し、のんびりした気分になっていた頃、法住寺の奥さまから一本の電話があった。数えてみれば、十一年前のことになる。

以前、法住寺の法要でマリンバの演奏をしたことがあったので、先方は私の連絡先をご存じだった。

法住寺は、東山区、京都国立博物館のすぐ南。千一体の十一面千手観音像を安置する三十三間堂で知られる蓮華王院の東に位置する天台宗の寺。

地理的にはそう説明するとわかりやすいが、そもそも蓮華王院は、法住寺を自らの御所と定めた後白河上皇が平清盛に命じて造営したもの。

以前、そんな両者の密接な関係を思い起こさせる場面に立ち会ったことがある。

二〇一五（平成二十七）年、骨董の先輩としても長くおつきあいいただいた、京都出身の版画家・木田安彦さんの葬儀でのことだ。木田さんの菩提寺である法住寺で執り行なわれた葬儀では、作品を通じて縁のある蓮華王院の門主を脇導師とし、法住寺の若い住職が葬儀の主となる導師を務められた。私は、どこか平安時代にタイムスリップしたかのような、不思議な錯覚に襲われた。

さて、電話の内容はこうだった。

親しくされている青蓮院の奥方が、マリンバを習いたいとおっしゃっている。ついては、私にレッスンを引き受けてもらえないだろうか。

青蓮院といえば、曼殊院、三千院、毘沙門堂、妙法院と並んで、皇族ゆかりの天台宗五門跡寺院の一つに数えられる格の高い寺だ。

自分の奥さんのことを冗談めかして「奥方」と呼ぶ人がいるが、こちらは正真正銘の奥方だ。「奥方がレッスンって、うちの、こんな長屋に来られるんですか?」と、言葉にしたわけではない。しかし、先方は、そんな思いが私の頭の中を駆け巡っていることに、察しがついたのだろう。「先代の奥方は厳しい方でしたけど、今の奥方はテニスを楽しまれるような気さくな方ですので、なんとかお願いします」とおっしゃった。

それまで、大人の趣味の方のレッスンはしたことがなかった。

趣味でお稽古される方なら、ご機嫌をとって楽しませるようなことも必要だろう。それは自分の性に合わないと思っていたからだ。

とはいえ、ご本人とお話もせずお断わりするのは憚られた。

マリンバを習うなら、家で練習するための楽器を手に入れる必要がある。

ピアノやヴァイオリンなら安価な物から一流品まで、一応サイズは同じであるが、マリンバの場合、価格によって音域も違えば、鍵盤の幅まで違う。お目に掛かって、そのあたりの説明もし

たかったので、とにかく一度、うちに来ていただくことにした。

私は青蓮院あたりに行く時は、まず自転車だが、奥方が自転車で来られることはないだろう。とりあえず、車を想定して道案内をした。

初めて来られた東伏見具子（ひがしふしみともこ）さんは、うかがっていた通り、気さくな方だった。私の説明を上からでも下からでもなく、正面から受け止めておられる様子が気持ちよかった。

楽器は、私が使っている物と同じ大きなサイズのものを入手されることになる。カタログに載っている市販品ではあるが、そうそう購入されるものでもないので、オーダーしてから東伏見さん用として調律し、組み上げてもらうことになる。楽器が完成する三ヵ月後にレッスンをスタートすることになった。

東伏見さんは、「今日はタクシーで来たんですけど、便利な路線があるので、次からはバスで来ます」とおっしゃった。「奥方と市バス」の組み合わせに、これからのレッスンの楽しさを予感した。

自分がお世話した楽器は、できるだけ納品時につきあい、検品することにしている。楽器の確認はもとより、楽器を置く部屋が、よく響くか、否か。生徒さんのレッスン室の状況を把握しておくことで、的確に練習のアドヴァイスができるからだ。

夏のある日、完成したマリンバの納品のため、日本を代表するマリンバメーカーの一つ、こお

ろぎ社の営業担当、前川さんの車で、東伏見さんのお宅、すなわち青蓮院に向かった。旧知の前川さんを驚かせようと、「生徒さんの家」については、詳しくは説明していなかった。

作戦成功。

大きな門をくぐり、坂道をあがり玄関へと向かう。

東伏見さんが購入されたのは、幅二百七十三センチ、重量百十三キログラムという大型のマリンバで、十四のパーツに分解することができる。

箱に入ったパーツを一つずつ運び込み、楽器を組み立て検品完了。

華頂殿とよばれる客殿に案内され、室町時代の相阿弥作と伝えられる立派なお庭をみながらお茶をいただいた時の前川さんの驚きぶりは、想像以上だった。

マリンバが届き、いよいよレッスンがスタートする。

具子さんは、学習院女子短期大学の出身。

学習院には、一九二二年創設の部活動「学習院輔仁会音楽部」がある。

同音楽部は、天皇陛下がヴィオラを演奏されていたことでも知られる管弦楽団の他、合唱団も有する。具子さんは、女声合唱の他、混声合唱にも参加、また管弦楽団にヴァイオリンが足りないと請われ、小学生の時にたしなんだヴァイオリンの腕前を活かしてオーケストラにも加わった。学習院出身の故・岩城宏之さんの指揮で、モーツァルト『レクイエム』や、ドヴォルザーク『交響曲第八番』を演奏したと聞いた。幼稚園の頃から中学生の頃までは、ピアノのお稽古もしてい

たということだったので、読譜は何の問題もないようだ。

ヴァイオリンなど音を出すまでに時間のかかる楽器とは違い、マリンバは叩けば音が出るので、すぐに曲が弾けるようになる。

音楽の素養がある人がマリンバを始める場合、これが意外とやっかいだ。表現するための基礎的な技術を身につけず、簡単に弾けるからと、どんどん新しい曲に挑戦していくと、すぐに自分の演奏に物足りなさを感じてしまうだろう。

かといって、まったくの初心者向きの技術先行のレッスンもしたくない。

楽譜を読み込むなかで、自然に「こんな風に演奏したい」という自分自身のイメージができ上がり、その結果「技術を磨きたい」という欲求が高まれば理想的だと考えた。

東伏見さんには「プロに教えるのと同じ事を教えます」と宣言した。

最初の一年は、多少の辛抱がいる。

四分の四拍子で四分音符が四つ並ぶような単純な楽譜を繰り返し演奏するのは、退屈に感じられるのではないかと心配があった。

しかし、東伏見さんは、シンプルな音楽の中で、「良い音とはどんな音か」「音楽にそぐった音色とは」と考えて音を出すことに、興味を持って取り組まれた。

後で聞けば、私が「趣味の人、お稽古の人」という対応をしなかったところが嬉しかったとい

う。私からすれば、そのように感じてくださる生徒さんに巡り合えたことは、幸せだった。

すでに書いたように、青蓮院は門跡寺院、つまり旧皇族が住職をつとめる寺だ。

具子さんのご主人、青蓮院門跡第四十九世御門主東伏見慈晃さんの父、東伏見慈洽さんは、昭和天皇の皇后陛下、良子女王（香淳皇后）の弟君にあたる。

香淳皇后のご実家は、久邇宮家。久邇宮邦彦王と倶子妃の間には、三男三女があった。香淳皇后の妹の二人のうち、信子女王は公家の三条西公正伯爵に、智子女王は東本願寺第二十四世・大谷光暢に嫁いでいる。

長兄の朝融王は久邇宮家を継ぎ、次兄は皇族から離脱して華族となり久邇邦久侯爵となった。香淳皇太后の一番下の弟にあたる邦英王が、東伏見伯爵家を創設し、青蓮院門跡となった東伏見慈洽で、つまり具子さんの義父ということになる。

こうしてみれば、東伏見家の皆さんの心中はともあれ、愛子内親王のお相手候補の一人として具子さんのお孫さんの名前を挙げる週刊誌の思惑もわからないではない。

具子さんも出身校が学習院とうかがっていたので、なんとなく、ご実家はお寺かな、ご主人とは学習院のつながりで知り合われたのだろうか、いずれにせよ名家のご出身なのだろうと思っていた。とはいえ、プライヴェートなことを知ったところで、レッスン内容が変わるわけでもなし、これまで特に尋ねることもなかった。

このたび、生徒さんのことを書くにあたり、あらためてお話をうかがった。

具子さんは、一九五一（昭和二十六）年生まれ、大阪府枚方（ひらかた）市出身。

島津製作所に勤める父親の転勤に伴い、中学三年生の時、東京に引っ越した。京都に本社を置く島津製作所は、ノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんが在籍することでも知られる、精密機器、計測器、医療機器などを製造する名門企業。具子さんが都立高校を卒業した頃は、学園紛争のまっただ中。落ち着いた環境で勉強できる学校ということで、大学は学習院女子短期大学を選んだ。

学生時代、短大の友人と京都に観光旅行したことがある。

京都の穴場のお寺としてガイドブックに紹介されていた青蓮院を訪れ、楠（くすのき）の前で写真を撮っている。しかし、この時まさか自分がこのお寺へ嫁ぐことになろうとは、思ってもいなかった。

就職活動、時は売り手市場。

埼玉銀行（現、埼玉りそな銀行）秘書課に勤務する音楽部の先輩に請われ、友達四人で就職の面接に出かけた。立派なお寿司までいただき、面接合格。

しかし、埼玉銀行に就職することに決めた矢先、父親が転勤で大阪に戻ることになる。辞退しようかと思っていたところ、銀行側が大阪での採用に変更してくれたことで、大阪支店に就職することになった。

そこで、出会ったのがご主人の慈晃さんである。

会社では、「あの方は、皇太子さまの従兄弟なのよ」と教えてくれる人もいたが、九つ上の先輩だったこともあり「そうなんだ」という以上の感想は持たなかったという。

おつきあいが始まったのは、具子さんが退職してからのこと。

「いなくなると、その存在の大きさに気付く」

テレビドラマのような展開である。

乗馬のお誘いがあった。

慈晃さんも学習院の出身で、学生時代は馬術部に所属していたそうだ。

そうして結婚に至るのだが、ここでも具子さんに、旧皇族家に嫁ぐという気負いはなく、「銀行員の妻」という気持ちの方が強かった。

とはいえ、結婚となれば、民間人でいえば「伯母」にあたる当時の香淳皇后にご挨拶するため御所に上がることになる。

通常は皇后だけのところ、この日は昭和天皇もお出ましになり、慈晃さんは「結婚することになりました」と御報告したという。

結婚後、具子さんは、ご主人のニューヨーク支店勤務に伴い、アメリカ暮らしも体験した。

マリンバとの出会いは、この時に遡る。

ニューヨークを引き揚げる際に、まだ幼かった長男、長女を連れてラスベガス、ロサンジェルス、サンフランシスコ、ハワイと回った。

サンフランシスコで立ち寄ったのが、同地で暮らしていた義父の同級生宅。そのお宅に、アメリカ人であるご主人のマリンバが置いてあった。

叩かせてもらうと、素晴らしい音色がする。「この楽器をやってみたい！」と思った。

帰国後は、何かと忙しくマリンバどころではない日々が続いたが、マリンバを習ってみたいという気持ちは持ち続けていた。

そのうちご主人は、周りからの勧めもあり、父の跡を継ぐべく一九九三年に得度、青蓮院に入山される。ここで、具子さんは「銀行員の妻」から「青蓮院の奥方」に転身することになる。

もともと、朝早くから出勤し激務をこなすご主人を見ていて、いつ辞めてもいいのよ、という気持ちはあった。自身が置かれる立場についても、さして抵抗感はなかった。

もちろん、格式の高い門跡寺院を守るという重責は計り知れないものだろうが、檀家を持たない分、信徒さんとの古くからのしがらみがない、というのも事実だろう。

銀行員だったご主人は、叡山（えいざん）学院、大正大学で仏教学、天台学を修められ、二〇〇三年、青蓮院門跡第四十九世ご門主に就かれた。

当初は、観光案内の看板も手作りだった。季節ごとに「春」「秋」と書き換え、夫婦で紙の両端をもって、両面テープで貼り付ける。ポスターの色を決めたりもした。

慈晃さんは、銀行勤めで培った経済感覚を駆使し、社会貢献も視野にいれてお寺を運営する。

当時なかなか発表の場がなかった「京都伝統産業青年会」には、庭のライトアップに合わせて展示会の場を提供した。「京都伝統産業青年会」は、染匠、清酒、石材、造園、表装、竹材、漬物、京人形、陶磁器、西陣帯地、色紙短冊、扇子団扇、仏具、念珠と、多岐に亘る会員からなる。

具子さんは、うちあげの料理作りまでを買って出た。

やはり、青蓮院当世の大仕事としては、京都東山山頂、将軍塚に大護摩堂「青龍殿」を建立、落慶されたことだろう。

北野天満宮前、警察の柔道、剣道の道場として活用されていた「平安道場」。この建物は、一九一三（大正二）年、大正天皇の即位を記念して「大日本武徳会京都支部武徳殿」として建立されたもの。外観は純和風ながら、屋根を支える小屋組と建物の基礎は西洋の技術を用いる、大正時代に典型的な和洋折衷で、価値の高い建造物。戦後に京都府に移管されていたが、傷みが激しく、修繕に多額の維持管理費用がかかることから、解体処分が決まっていた。

これを、国宝・青不動をお祀りする「青龍殿」として青蓮院の所有地である将軍塚に移築、再建することとなった。

ちなみに、将軍塚の名は、桓武天皇が、都の鎮護のため、鬼門の方角に当たるこの土地に、二・五メートルの将軍の土像を作り、甲冑を着せ鉄の弓矢と太刀を持たせ、塚に埋めるように命じたことに由来する。

新設された、清水（きよみず）の舞台の四・六倍の広さのある木造大舞台からは京都市内を一望することができる。

この大仕事にも、具子さんは陰になり日向になりご主人を支えた。

今も、ライトアップなど催しの際のアルバイトの段取りから、経理まで一手に引き受けている。多忙の日々も、活き活きと楽しそうで、息苦しいところがない。

二〇一一年にレッスンをはじめられ、早、十一年目。

練習は、観光客が寺を訪れるまでの時間、毎朝七時から八時の一時間。月に一度、九十分のレッスンを欠かさず続け、すでに四本バチを自在にあやつり、聴かせる音楽を奏でられている。

毎年、年初に行なう生徒の発表会「試演会」は、リラックスした雰囲気の中、私が司会をしながら進める。具子さんの演奏のあと、ご主人に「奥さんの演奏は、いかがでしたか」と尋ねれば、目を細めて「よかったと思います」と応えられる。

家でも、「最近、うまくなったんじゃない？」とおっしゃるそうだ。

たしかに、私もそう思う。

東伏見さんは、公益社団法人全日本仏教婦人連盟の会長を務めている。

二〇一九年、東京のホテルで開催された連盟の第六十六回大会には、私も演奏のゲストとして

呼んでいただいた。その際、東伏見さんは、百名ほどの来賓や会員さんの前で一曲、私とのマリンバ連弾で演奏を披露されることになった。

この日の第一部は、法要に続いて、ご挨拶などがある。会長である東伏見さんとしては、着物姿でなければ格好がつかない。しかし、二部でマリンバを弾く時、着物では袂が邪魔になる。そんなわけで、一部が終わったところで、洋服に早変わりされることになった。

すでに準備を終えていた私は、お手伝いすることにする。

東伏見さんは「先生に手伝っていただくなんて」と恐縮されていたが、青龍殿の落慶の際に誂えられたという美しい青地の付下げ。菊の御紋の付いた着物を触ることなど、この先、そうそうないだろう。そう思うと、愉快な気分になった。

角打ちとヴェルディ

いつまでも続いて欲しい、と願う店がある。

中京区高倉通錦小路上ルの松川酒店がそれだ。

それほど足繁く通っているわけではないが、そこにあるだけで安心する。

店主の松川禮三さんとは、知り合って十年近くになるだろうか。

ある日、酒造メーカーのロゴ入りジャンパーを着てバイクに乗ったおじさんが、突然うちに訪ねて来られた。

そして、人懐っこい笑顔でこうおっしゃった。

「今度、京都ヴェルディ協会で、演奏してもらえませんか」

酒屋のおじさんの口から出た歌劇王ヴェルディの名前に、私はきょとんとしてしまった。

聞くと、松川さん自身はヴェルディやオペラのみに強い思い入れがあるわけではないが、クラシック音楽を聴くのが好きでこの団体に所属している。これまでに私の演奏は何度も聴いている。是非他の会員にも聴いてもらいたい。ついては、夏にホテルで開催予定の懇親パーティーで演奏してもらえないだろうか、とのことだった。

「私との出会い」は、たまたま訪れた「茶道資料館」だったとのこと。そういえば以前、京都市上京区にある裏千家の施設、茶道資料館でコンサートをしたことがある。コンサートの日は開館時間が延長され、コンサート終演後にも展示を鑑賞することができるという趣向だった。

松川さんは、ちょうどその時、展覧会「裏千家十五代家元・鵬雲斎千玄室（ほううんさいせんげんしつ）の茶」を観にきて、たまたま見つけた私のコンサートを聴いて帰ったそうだ。なかなか粋な方である。

お若く見えるが母と同じ年、一九三六（昭和十一）年生まれの松川さんは、中学生の時レコードで聴いたフランク『交響曲ニ短調』でクラシック音楽に魅せられた。

岡崎の地に、京都初、音楽会にも対応するイベント会場、京都会館（現、ロームシアター京都）の開館したのが、一九六〇（昭和三十五）年。松川さんは、その前の時代から「松竹座」などで開催される演奏会に足を運んだ。一九五〇年代、フランスピアノ界の最高峰と言われたラザール・レヴィら、往年の名演奏家に接した話などをうかがい、この方は相当の強者（つわもの）だ、と感じた。

それから、とんとん拍子で話が進み、京都ヴェルディ協会のコンサートが実現した。

以降、松川さんは、関西圏での私のコンサートには必ずといっていいほど、聴きに来てくださる。松川さんは、とても信頼のできる耳の持ち主であり、私にとっては、こわいお客さんの一人でもある。

一方、私が初めてお店にお邪魔するまでには、知り合って三年近くがかかった。

松川酒店は錦市場の西側入口のすぐ近くにある。うちからは自転車で五分ほどで、店の前は何度となく通っていた。だから、夕方になるとそこが立ち呑み処となることも知っていた。

しかし、仕事帰りのサラリーマンで賑わう店内。一人では入りづらく、いつも素通りしていた。

ある日、ふと決心をして足を踏み入れてみた。間口はそんなに広くないので、気をつけなければ通り過ごすくらいだが、店内は大きな梁がのぞく、どっしりとした造りで相当な奥行きがある。

満員のお客さんで賑わう中、店のシステムがわからず立ち往生していると、そばにいた男性が気さくに声を掛けてくださり、この店の流儀を教えてくださった。

客は、入ってきたらまず、酒のケースを積み上げた「テーブル」の上に、小学校の給食を思い起こさせるアルミトレイを置いて席を確保する。

席が決まれば、冷蔵庫から自由に飲みたいものを出してくる。

駄菓子屋さんにあるような蓋付き透明ケースに入った乾き物、ざるの中のゆで卵、冷蔵庫の中にあるパック入りの刺身や、枝豆なども自由に出してよい。おでんは、頼めば皿に盛ってもらえる。

帰る時には、常連さんから親しみを込めて「おかあさん」とよばれる松川夫人にお勘定をお願いする。基本的には、自己申告制。トレイの上の空き缶などを見せて「これとこれをいただきました」と言えば、使い込んだ五つ珠のそろばんで手早く計算してくださる。

客は、特に歓迎されるわけでも、一見だからと拒絶されるわけでもない。心地よい居場所は自

分自身で見つける。それができた人が常連になっていくのだろう。壁にいっさいの値段や注意書きは貼っていない。開店、閉店時間も正確に決められているわけではない。これが、店と客の絶妙な緊張感をもたらし、日が経つと共に、信頼感へと変わっていくのだろう。

なんとも京都的だ。

規則を掲げるのではなく、場に集う人達による自主的な運営体制は、理想的な社会モデルにすら見えてくる。

私も何度か通い、顔を覚えてもらう頃には、少しずつお店のことがわかってきた。

さりげない視線で店全体に目配りする、アルバイト店員のような何人かの男性は、この店の常連さんである。誰に頼まれたわけでもなく、自主的に店を手伝っている。

その中に、ふと、知っている顔があった。

四条大橋の南座内にある「矢倉寿し志満家」でお寿司を握っておられた松本さんだ。自宅がすぐそばなのだそうだ。

常連さんには「松」が付く名前の人が多いので、私の知っている寿司職人の松本さんは「すしまっちゃん」と呼ばれている。このほかに、銀行勤めの「ぎんまっちゃん」、文具屋勤めの「ぶんまっちゃん」がおられるらしい。お互い、フルネームは知らない。親しいながら、つかず離れずが居心地よいのだろう。

店頭の冷蔵庫では、缶ビールや缶酎ハイが目を引くが、奥の冷蔵庫には瓶ビールが入っている。

これも自由に出してよい。コップや栓抜きの置き場所もそのうち目に入るようになる。瓶ビールを自然に飲むようになれば、常連客の仲間入りだろう。

また、表の冷蔵庫の下の段には大阪・能勢（のせ）の銘酒「秋鹿（あきしか）」の一升瓶が冷やしてあり、これも自分でコップに注いで呑むことができる。もちろん、何杯呑んだかは自己申告。すなわち、何杯呑んだかわからなくなるほど呑んではいけない。

私は時々、コップに半分ほどだけ注いでいただくことがある。コップ酒をぐいぐい呑むほど強くないことを知っているおかあさんは「そんなに呑んでないでしょう」と、申告せずともコップ半分だけのお勘定にしてくださる。見ていないけれど、見えている。これも京都的だといえるだろう。

頼めばお皿に盛ってもらえるおでんは、おかあさんの特製。定番のごぼ天から、ぎょうざを包んだ、ぎょうざ天など変わり種まで、練り物は、錦市場の「丸常（まるつね）」と決まっている。毎日鶏（とり）ガラで出汁をとり、醤油とみりんで味付けする。先代から受け継いだレシピで作る、コクがあるがさっぱりと上品なおでんを食べれば、この店の奥行きが感じられるというものだ。

自然な味のぬか漬けも美味しいし、牛すじの煮込みも人気のメニューだ。

冷蔵庫の中のパックに入ったなんでもないように見える刺身も、食べてみると間違いないものであることがわかる。これは、錦市場の魚屋「錦大丸（にしきだいまる）」が適当に見繕（みつくろ）って届けてくれるもの。

時には、お父さんの手料理が振る舞われることもある。

現在の場所で松川酒店の営業が始まったのは一八八八（明治二十一）年。それ以前、江戸時代には、造り酒屋として鷹司家と、近所にある真宗佛光寺派の総本山、佛光寺のお酒を造っていた。

鷹司家は鎌倉時代、近衛家から分かれた五摂家の一つ。京都御苑内に邸宅跡がある。一方の佛光寺も鎌倉時代、親鸞が山科に結んだ庵が始まりであるとの伝承がある。松川酒店には、この時代に使われていた酒樽がさりげなく置かれている。

現在の形の酒店になってから五代目の松川さんは、若い頃から飛行機に憧れ、戦後すぐの運輸省（現、国土交通省）の養成所に入った。

「飛行機に乗ると、どうしても左に曲がってしまう。だから、飛行機乗りを諦めて航空自衛隊で管制官になった」というのが、嘘か本当か、松川さんの話である。

若い頃、上官に呼ばれて「どうだ」と聞かれ、「はい、ありがとうございます」と応え、伴侶となったのが、今の「おかあさん」、とのこと。

自衛隊、総務課長時代には各国政府要人の京都でのもてなしにも一役買った。松川さんは英語が堪能で、その流暢な話し振りは、私などまったく足元にも及ばない。

松川酒店の立ち呑みは、その発祥の形、酒屋の店頭で酒を樽から出し枡の角に口をつけて飲む「角打ち」スタイルで始まった。

かつて、升酒を飲む客は、店先に置いてある塩と味噌をあてにした。

松川さんは子どもの頃、客が指を突っ込んで酒のあてにした味噌をヘラでならすのが仕事だったそうだ。かつては京都証券取引所が近くにあり、「場立ち」の人達が昼の休憩時間、ここで景気づけにきゅっと一杯ひっかけて活気溢れる立ち会い場に戻っていったという。

二十代から半世紀通い続けているという常連さんから外国人観光客まで、男性も女性も老いも若きも入り乱れる。なんでもない缶ビールも、松川酒店で呑むと「ここでしか呑めない味」になる。多くの人がそれを楽しみ、明日への活力を得るのだろう。

私は、この松川さんのお店で一人の女性と知り合った。

一九四七（昭和二十二）年創業、京都を代表する喫茶店の一つ、イノダコーヒの本店店長を務め、現在は人事課に勤務している植坂理栄子さんだ。

彼女を取材させてもらったことがある。

植坂さんの実家は、嵯峨嵐山の煎餅屋だった。販売する店ではなく、製造卸である。

お父さんが、一枚ずつ丁寧に煎餅を焼く。お母さんとパートさんが、袋詰めする。そんな仕事で、自分とお兄ちゃん二人、育ててもらった。

お父さんが亡くなって、煎餅一枚一枚で育った有難みをしみじみと感じる。だから、コーヒーも同じ事。一杯ずつ丁寧に入れて、一人ずつのお客さんと丁寧に接さないといけない、という。

植坂さんは、中学・高校とソフトボールの強豪校で野手として活躍した。スポーツ入学で短大

に進学するも、試合中に大きな怪我をする。その後、体育教員の道も諦め、選んだ就職先がイノダコーヒだった。

ちなみに、イノダコーヒの店名は、コーヒーと伸ばさず、ヒで止める。

イノダを選んだのに大志はなかった。

高校時代、アルバイト先を探していた時見つけたのがイノダコーヒ。特にコーヒーが好きだったわけでもない。三社並ぶ求人の中で、一番制服が「悪くはない」という理由だった。

その後、短大時代、ソフトボール部を辞めアルバイトすることになった時も、就職活動が順風満帆とはいかなかった際に行き着いたのも、イノダだった。

何かの縁があったのだろう。

イノダの社員には、一日一杯のコーヒー試飲が義務づけられている。「何かおかしいと思ったら、すぐに申し出るように」と言われる。植坂さんは、こうしてコーヒーの味を覚え、本店キッチンから、本店レジ、各支店副店長、新店オープンの札幌勤務と渡り歩き、三条支店の店長を経て、三十代半ばで本店店長に抜擢された。

京都の喫茶文化を語るに欠かせない名喫茶店、イノダコーヒの顔ともいえる本店、女性初の店長。古くからの常連さんに認めてもらえるように、ご近所さんにも愛される店であり続けられるように振る舞う。また従業員とのコミュニケーションも大切にと心がけた。

イノダと言えば、紫煙をくゆらせる高齢層の常連さんのイメージがあるが、最近は、全面禁煙

となり、ご婦人方や子ども連れのお客さんも増えた。そうなると、食べやすさや見た目への工夫も必要となる。今は、いつ来ても変わらない昔ながらのイメージと、新しいお客さんに向けたメニュー作りの両立に気が配られる。

お客さんの「会いに来たわ」という言葉に励まされた植坂さんだが、仕事が終われば松川のおとうさんとおかあさんに「会いに行く」。プレッシャーに押しつぶされそうになった日々も、松川さんのところで息抜きをし、リフレッシュできたおかげで救われたと話す。

酒屋の松川さんは、時々客としてイノダコーヒを訪れる。

松川さんの目は、常に温かく、鋭い。

「うえちゃんは、たいしたもんや」という松川さんの言葉一つで、植坂さんの仕事ぶりがわかるというものだろう。

コーヒーに興味すらなかった嵐山の煎餅屋の娘が、父から受け継いだ職人の心を胸に、京都を代表する喫茶店で店長を務めた。「悪くはない」と制服に惹かれての就職だったが、店長を表わす黒服を身にまとい店に立つその表情は、私の目にもきりっとして凜々(りり)しく映った。

そんな煎餅屋の娘の心を受け止めるのが、他所にはないふんわりとした風格を漂わせる松川酒店の立ち呑みだ。この関係は、まさに京都でなければ生まれなかったのだろう。

あらためて、京都の厚みを感じると共に、末永い松川酒店の健在を願わずにはいられない。

次の立ち読み箇所に続きます

満永小百合さんのこと

「先生、自転車に乗ったら車道を走りますか。歩道を走りますか」

小百合ちゃんのお父さんに、そう聞かれた。
お父さんだって、私だって、そんなことはどうでもいい話だった。
でも、二人きりになって、話すことはそうなかった。

その前に、お父さんはぽつりとおっしゃった。
「連れて帰る洋服を持って来てください、って言われたんですよ」
私は「そうなんですか」としか返せなかった。
小百合ちゃんが入院するホスピスからの帰り道。私が自転車を置いてきた電車の駅まで送ってもらう車の中でのことだ。

おそらく、彼女はもうほとんど目も見えていないのだろう。私の知っているあのかわいらしい小百合ちゃんとは、姿形が違う人になっていた。

この度も、私が見舞いに行くというと、姉の絢子ちゃんがこんなことを教えてくれた。
「すぐ失礼なことを言うんです。とてもよくしてくださっている看護師さんにも。脳への転移か薬のせいか、言葉が制御できなくなっているみたいで。だから来ていただくのも申し訳ないです」と。
病室に入り、うつろな目の小百合ちゃんと少しだけ意思の疎通があり、そのあと彼女は眠りに落ちた。時が過ぎてふと目を開け、私がまだベッド脇に居るのがわかると、空をみながら温度のない口調で言った。
「まだいるんですか、帰ってください。大丈夫です」
これまでの彼女なら、たとえそばに居られることが煩わしかったとしても「先生、お忙しいでしょう。大丈夫なのでもう帰ってください」と言っただろう。
私は、すぐに失礼することにした。
そうして、お父さんと二人きりになった。

その数日後、二〇一〇（平成二十二）年十二月七日。
二年間、原発不明癌と闘った小百合ちゃんは、天に召された。
享年二十四。
一九八六年八月二十日生まれの満永小百合さんは、二つ違いの姉・絢子さんと共に、私のマリンバの生徒だった。

小百合ちゃんが十歳で小学校四年生、お姉ちゃんが六年生の頃からうちに通っていた。

仲のよい姉妹は、自身の子どもの頃を思い出すようでもあり、またこの控えめな愛らしさは自身のどこを探しても見当たらないものでもあり、とにかく月に二回、彼女らに会うのがとても楽しみだった。

海上保安庁勤務だった父・政幸（まさゆき）さんは、広島県呉（くれ）市の海上保安大学校の学生だった頃、くみ子さんと知りあった。

母・くみ子さんは、終戦後八年経った一九五三（昭和二十八）年広島市で生まれる。くみ子さんの兄がカトリック教会の運営する幼稚園に通う中で、くみ子さんの母はカトリックを信仰するようになった。

戦後の物のない時代、日々の暮らしの苦しさは、心の貧しさにも繋がるように感じたのだろう。くみ子さんの母は、聖書の「貧しい人は幸いである」という言葉に惹かれる。「日ごとの糧（かて）を今日も与えたまえ」というお祈りを聞き、明日のことはわからないが、今日のことならなんとか精一杯頑張れると考えた。そして、カトリックの信者となり、ご主人とくみ子さんら四人の子ども、家族全員が洗礼を受けた。

くみ子さんは、フルートを習っていた。地元広島のエリザベト音楽大学に進学。卒業後は、高校の非常勤講師や音楽教室のフルートの先生などをしながら忙しく過ごす。そんな中、日曜日には教会で奉仕をしていた。

政幸さんは、「教会に行けば、ただでご飯が食べられてお酒も飲めるらしい！」と聞き、週末には海上保安大学校の仲間と、教会の青年会に出入りするようになった。そして、そこで見初めた六歳年上のくみ子さんと結ばれた。

結婚後は、政幸さんの仕事柄、海沿いの街を点々と回る転勤族となる。

絢子ちゃんが生まれたのは、大分県。

小百合ちゃんは、政幸さんが呉の海上保安大学校で潜水を教えていた時代に生まれた。その後、横浜勤務を経て、新潟に移る。

ここで、満永さん家族は、ひょんなことからマリンバに出会う。

くみ子さんが、近くにできた大型ショッピングセンターに行った時のこと。

オープニングイベントとして、三名の奏者によるマリンバと打楽器の演奏があった。翌日も同じ催しがあることを知り「これは子ども達にも聴かせてやりたい」と、翌日は家族で出向く。

休憩を挟んで、三十分の公演が三回。

最初の公演を聴いて「三回とも聴きたい」という子ども達の希望で、全三回の公演を聴いた。おそらく、同じプログラムだっただろうに、飽きずに聴くとは、よほどそのパフォーマンスが気に入ったに違いない。

満永家四人の姿はさすがにステージの上からも目にとまったようだ。三回の公演が終わったら演奏者がすぐに飛んできて、「三回も聴いてくださって、ありがとうございます」と挨拶された。

こういう一言は、子どもの心に残るものだ。

その後、再度横浜に転勤になった際、通った小学校には、全国大会で金賞を受賞するような強豪マーチング・バンドがあった。高学年からの活動なので、まず絢子ちゃんがここに所属し、打楽器を担当。先生から、ヤマハでマリンバの個人レッスンが受けられると教えてもらい、通い始めたところで、京都に転勤が決まった。

お父さんは、翌年からの入部を楽しみにしていた小百合ちゃんも共に「必ずマリンバは習わせてあげる」と約束してくれた。

マーチング・バンドのメンバーのお母さんに、桐朋学園大学音楽学科ピアノ専攻を卒業された方がおられた。その方が、桐朋出身のマリンバ奏者・吉岡孝悦さんに「京都で誰か、マリンバの先生を紹介してもらえませんか」と頼んでくださったそうだ。

そうして紹介されたのが、私だった。

初心者の子どもであれば、悪い癖が付いてはいけないので、最低でも月に二回はレッスンをしたい。だが、同じ京都とはいえ、転勤先は日本海に面した京都府舞鶴市。当時の道路事情だと、舞鶴からは車で二時間半ほどかかる。

どうされるかと思ったが、他の選択肢を尋ねることなく、うちに通うことを決められた。

ご両親は真っ直ぐな方だな、という印象を持った。

ちょうど、連絡があってすぐ、私は京都コンサートホールでのリサイタルの予定があった。現

代曲やピアソラ作品などが並ぶ、けっして子ども向けのプログラムではなかったが、誘ってみる。
お母さんと食い入るようにステージを見つめる二人のお嬢さんの様子が目に留まり、ステージの上からでも、ああこれが満永さん親子だろうとすぐにわかった。

そうして、月に二回、通い慣れてくると毎週末の午前、家族四人で車に乗って拙宅までレッスンを受けに来られるようになった。
少し慣れてくると、子ども達二人をうちに降ろして、ご両親は京都の散策を楽しまれていた。その様子は、とても微笑ましいものだった。
当時、私は二十九歳。
いつも新しい音楽を求めていた。

作曲家・林光に『林光／ピアノの本』（全音楽譜出版社、一九七六年）という初心者向けのピアノ曲集がある。
まえがきは、こうだ。

この曲集におさめられた小品の大部分は、1968年から1973年にかけて、ぼくのただひとりのピアノの生徒、武満真樹（たけみつまき）のために、レッスンのたびごとに作曲した。

だからほんとうは、ぼくと真樹との合作といったほうがいい。
この曲集をつうじて、ひとりでも多くのひとが、ピアノを好きになってくれればとねがっている。

一九七六年5月　林光

本書は、林光さんが、同業の作曲家・武満徹の娘、真樹さん（現在、翻訳家、音楽プロデューサー）にピアノを教えるため作曲された作品を集めた曲集だ。

最初は四分の四拍子で八小節。「ドレ／ミソ／ファミ／レ／ソファ／ミド／レミ／ファ／ミ」、たったこれだけの単純なメロディーから始まる。右手と左手、同じ旋律を弾くやさしい曲だが、先生用のパートもあり、連弾すれば素敵なハーモニーを感じながら弾くことができるようになっている。

子どものために作曲されたが、いわゆる子ども向けではない。初心者もプロも、それぞれに楽しみながら勉強できる内容だった。

私は、これに倣って、満永姉妹のレッスンのために、進度に合わせて一曲ずつ練習曲を作っていくことにした。先生とマリンバの連弾で弾けると楽しいだろう。自身では作曲しないので、知り合いの作曲家に依頼する。どんな曲ができ上がってくるか。これなら、自分自身も毎回新しい曲に接し、レッスンを楽しめる。

そんな依頼を、京都市立芸術大学の先輩、土肥寿美子（どひすみこ）さんが引き受けてくださった。

四分音符、八分音符、十六分音符、と音符が細かくなっていく。楽譜がすらすら読めるようになってきたら、土肥さんには「今度は、変拍子をお願いします」とリクエストした。子ども達にとって八分の五拍子は未知の世界。ちょっとしたクイズを出すようで、私の方もワクワクした。

林光の曲集が初心者用ながら、いわゆる「子ども向き」ではないように、満永姉妹への曲も特に子どもを意識しないで書いてもらった。

初めての発表会は忘れられない。

気になっていたところで、小百合ちゃんはちょっとしたミスをした。ミスというほどでもないミスだったが、そこから涙が止まらなくなった。

本人には申し訳ないが、泣きながら弾くその姿があまりにかわいらしく、私の母などはもらい泣きしながら聴いていた。

いつも彼女らは、自身のレッスンが終わると、本を読んだり編み物をしたりして待っている。お互い、レッスンで相手が注意されていても褒められていても、いっさい気を散らさず自分のことに集中している様子に、いつも驚かされた。

二人とも優秀で、すぐに上達するので、教える方も楽しかった。

そういえば、お茶とお花の先生をしておられた母方のお祖母ちゃんによる俳画がほどこされた、

お手製のお月謝袋も楽しみの一つだった。

一度、満永家が舞鶴市に在住中に、私が舞鶴の歴史的建造物である赤煉瓦倉庫群（現、舞鶴赤レンガパーク）でコンサートをする機会があった。その時、自宅に招待してくださり、二人の幼い頃のアルバムなど見せてもらった。

「転勤族なので、大きな家具は持たないんです」と、身軽な感じの所帯道具が印象的だった。

二年ごとの転勤は容赦なくやってくる。

次の転勤先は、北海道の根室市。

さすがにうちまで通えないので、北海道の先生を紹介した。ここへも、車で三時間かけて通われたが、先生と気が合わず続かなかった。

絢子ちゃんの言い分。

レッスンで、ヨハン・シュトラウスの『春の声』を弾いていた。まだ弾けていないところがあるにもかかわらず「もう夏になるから、この曲はできたことにしましょう」と言われた。それは、おかしい。

二人とも、納得のいくまで粘り強く取り組む姿勢があった。彼女達は、夏になっても秋になっても、きちんと弾けるようになるまで『春の声』の指導を受けたかったのだろう。

そんなわけで、私が東京に行く時、北海道から出てきた満永姉妹と落ち合って、レンタルスタジオでレッスンをしたこともあった。

そのうち、姉の絢子ちゃんが高校受験をする年齢になる。大学進学を見据え本州で進学するため、お父さんを北海道に残し、お母さんと娘二人は、お母さんの実家のある呉市に引っ越した。

ここからは、月に二回、新幹線でうちまでレッスンに通われた。

ご両親の宝物の一つに当時、姉妹からもらった結婚記念日のプレゼントがある。

二人は、バスケットに入ったお花柄のかぎ針編み作品を贈ることに決めた。

立体ではなく平面の小さな作品。

とはいえ、家で作ればお母さんに見つかってしまう。

新幹線の中は、二人だけの秘密の時間だった。レッスンの行き帰りの新幹線車中で完成させ、子どもらしくノートの紙に張り付けて贈った。

小百合ちゃん亡き後、額装して飾られているその愛らしい編み物のお花。張り付けたノートの罫線（けいせん）がなんとも微笑ましい。

そういえば、こんなことがあった。

私が札幌コンサートホールＫｉｔａｒａでリサイタルをするのに、お父さんが一人、道東の根室から車で八時間かけて聴きに来てくださるという。

おそらく、マリンバの演奏を聴くということが第一目的ではなく、娘達の先生のコンサートに、家族の代表として足を運ぶことに意義があったのではないか。

そんなところにも、家族の温かなつながりが感じられた。

私は前もってレッスンの時に、当日演奏する予定のマリンバソロ曲、高橋悠治（たかはしゆうじ）『橋をわたって』を姉妹の前で演奏し、その印象を絵に描いてもらった。

その絵をお父さんに送り、お父さんにどんな曲かイメージを膨らませた上で、聴いてもらったのだ。

ベトナム民謡をテーマにした序奏と即興。

元になったベトナム民謡には、こんな歌詞がついている。

あのひとに上着をあげた
家に帰って父母に　橋をわたるとき風にとられた、と嘘をついた

あのひとに指輪をあげた
家に帰って父母に　橋をわたるとき落とした、と嘘をついた

あのひとに菅笠（すげがさ）をあげた
家に帰って父母に　橋をわたるとき風にとられた、と嘘をついた

小百合ちゃんが、森に佇(たたず)む鹿の絵を描いたのを覚えている。

こんな風に、私は音楽を通して彼らと交流することを心から楽しんだ。

海上保安庁は、公務員なので、社宅とはいわず「宿舎」というのだそうだ。

当時、お父さんは単身赴任。子ども達の長期休みになると、母と娘達がお父さんの暮らす宿舎に行き家族四人で過ごす、というのが一つのサイクルになっていた。

姉妹は、自分達が宿舎を引き揚げた後、お父さんが寂しいだろうからと、たくさんの手紙をいろんなところに隠して家を後にした。手紙探しゲームだ。

手紙の内容は「とーちん、おかえり」など、たわいもないこと。鞄の中やカーテンレールの間。これから使うトイレットペーパーや夏なら冬まで見つけられない片付けられたセーターの中など、時間差も意識して、たくさんの手紙を置いて帰った。

お父さんは、そんな娘達がたまらなく愛おしかったことだろう。

長らく宿舎暮らしが続いていた満永家も、いよいよ娘達の大学進学を視野に入れ、家を構えられることになった。

お父さんの「マリンバのレッスンに通いやすいから」の一言で、京都で家を探される。

お父さんの故郷鹿児島でも、お母さんの故郷広島でもない。ただマリンバのレッスンに通いやすいというだけで、縁もゆかりもない京都である。京都は日本人の憧れの地の一つとはいえ、だ。

天使突抜おぼえ帖
通崎睦美・著

発　行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定　価：2,200 円（10％税込）
発売日：2022 年 4 月 26 日
ＩＳＢＮ：978-4-7976-7410-1

ネット書店でのご予約･ご注文は こちらにどうぞ！